

入ソ当時全部取られていたので身軽でナホトカへ着いた。政治的な教育があると聞いていたが、何も無かつた。

二十二年十月二日、待ちに待った迎えの船第一大丸に乗船。十月六日、舞鶴港に上陸。十五日、懐かしの我が家へ帰ることができた。三カ月の休養、体の回復後、七年ぶりに元の職場へ勤務。三十余年勤め、無事退職し、最近は老人会の世話をしたり、ゲートボールで体の健康維持に努めながら、花木の盆栽の育生を手がけて楽しく暮らしている。

我が人生

島根県 佐藤 豊

島根県飯石郡三刀屋町において大正十三年二月出生。昭和十四年、一宮尋常高等小学校卒業。昭和十七年、国民青年学校本科四年在校中舞鶴海軍工廠に徴用。同年七月、現役兵志願、甲種合格。同年十二月十

日、西部第三部隊に入隊。五日後の十五日、移動のため下関港より朝鮮釜山に上陸、列車で山海関經由、中支当陽に到着。藤六八六五部隊に編入、実戦を交えながらの初年兵教育を受けた。修了後、付近の警備と討伐作戦に三年間参加した。

二十年四月、当陽を出発、鉄路を行軍。本土防衛の任に就く予定が、突然の命令により、満州四平街に至り、約二カ月の間、陣地構築、初年兵教育に当たる。八月二十六日、信じ難き終戦を聞き、大隊長命令により、付近の小高い丘の上で天幕生活が始まり、九月十日頃ソ連軍の命により武装解除となる。銃は全部撃針を折って、十丁ずつ束ね、指定の場所へ兵器弾薬も全部山積みした。

夜間になると満人が二十人〜三十人くらいが棒切れや鎌を持って物取りに來たが、二人〜三人と仲間が怪我をすると直ぐに帰って行った。

約二カ月間このような状態が続いた。

十月十八日、待望の東京ダモイということでみんな大喜び。汽車は中を二段に仕切った有蓋車に乗せられ

北進、黒河より対岸ブラゴエンチェンスタクに渡り、列車は昼夜を問わず走り続けた。カザフスタンのアルマータ収容所に入った。アルマータで二百人ずつ編成されカラタオに向かったが、家屋はなく、ソ連労働者と日本兵五十人くらいで、半地下の暮舎作りに半年間もかかった。その間気温も零下十五度から二十度にもなり、作業ははかどらず、一方他の作業班は、水道掘り、鉄道敷設作業等分業作業に従事した。

家造り作業が終わると、収容所の近くに小高い山があり、この山はその昔海鳥の糞でできた化石の山で、その化石を掘り出す作業が始まった。二人一組でマイトの穴掘り作業でノルマが一・五メートル一・八メートルだったが、頑張っても一日一メートルがやっと掘れる状態だった。食事は黒パン一切れに水のようなスープでは体力が続かない。慣れない作業にダワイダワイとせきたてられ、かなりの重労働のため、体調を悪くして高熱を出して作業を休む者が出る。微熱なら働かされ、軍医の診察で休養するよう言われても、ラポーターの強要あり。そのうちに付近で化石を砕き粉

末にし貨車積み作業が始まる。ラーゲル到着時に、腕時計や万年筆、衣類、写真に至るまで取りあげられ不自由な生活の連続だった。食糧との物々交換するものもなく、毎日が飢えと寒さで衰弱者が多発。たまたまソ連上部の視察があり、収容所長が我々抑留者用の食糧の上前を抜き取ったことが判明し、直ちに解職になり、その後は幾分よくなった。

しかし、重労働と酷寒の地で、餓死者を含む多数の同胞が倒れ、明日は我が身の思いにおののいた。

三年後、カラカンダ収容所に移され、炭坑作業に約一年間従事した。

ダモイの話が始めていたが、いつもだまされていたので、信用できず人ごとのようだった。

二十四年九月頃、所持品をまとめるよう通達があり、間もなくカラカンダを出発、十月十日頃にナホトカに到着した。日本から迎えるのを待ちながら、半信半疑で作業していた。

二十四年十一月二十二日、高砂丸に乗船、二十六日、舞鶴港に上陸した。十一月三十日、懐かしの我が

家に復員。その後半年間休養、体の回復後、町内の会社に就職。五十九年二月まで三十三年間勤務し退職した。

最近は盆栽造り、野菜作り、ゲートボール等で、楽しく暮らしている。

密林の火葬

高知県 齊藤 拓三

昭和二十年十二月上旬、私たちが雪道を徒歩でピラ二十キロの収容所へ辿り着いた時は、既に日は西に没していた。収容所は原生林の中に二棟孤立して並び、四囲はシベリア赤松の大樹が天に向かって林立し、重畳と連なっていた。

氷点下三十度―四十度という寒冷の中を、毎日歩哨に銃を向けられながら伐採作業や木材の集積作業に従事したが、このような重労働のため疲労衰弱の上に、食料不足による栄養失調に陥り、下痢を伴ったままや

せ細っていく。その体は骨と皮ばかりになり、まるで枯れ木のようなであった。山から帰る途中疲労のため倒れ、そのまま死ぬ人も増え続け、収容所から見える林の中では、死んだ人を焼く真つ赤な炎が夜を徹して燃え続けていた。

ある日の夕食後のことであった。私が寝る準備のため屋外に出て雪の上に放尿して戻ると歩哨が所内について、使役四人をすぐ出せと言っている。三人は確保できたようであるが、あと一人が足らぬようで、そこを運悪く私がかまってしまった。仕方なく、急ぎ防寒服をまとい歩哨の後についていく。収容所から三十メートルぐらい離れた小さな空室に歩哨が入る。私たちも続いて入った。室の真ん中の土間に一枚の板が置かれ、その上に死体が横たわっていた。中は暗かったが開かれた入口の雪明かりで、それが死体と認められた。栄養失調であろう、上下衣袴が脱がされ、白い襦袢のまま寒々と置かれている。死ぬと急激に頬がこけ始めるためか、頬の肉が骨に食いついて、まるで骸骨のようであった。